

ノート

関口存男のファウスト翻訳¹

柴田 明子

ゲーテ „Faust. Eine Tragödie“ 第 1 部第 1656—1670 行

MEPHISTOPHELES.

Ich will mich hier zu deinem Dienst verbinden,
Auf deinen Wink nicht rasten und nicht ruhn;
Wenn wir uns drüben wiederfinden,
So sollst du mir das gleiche tun.

FAUST.

Das Drüben kann mich wenig kümmern;
Schlägst du erst diese Welt zu Trümmern,
Die andre mag darnach entstehn.
Aus dieser Erde quillen meine Freuden,
Und diese Sonne scheint meinen Leiden;
Kann ich mich erst von ihnen scheiden,
Dann mag, was will und kann, geschehn.
Davon will ich nichts weiter hören,
Ob man auch künftig haßt und liebt,
Und ob es auch in jenen Sphären
Ein Oben oder Unten gibt.

¹ 本稿は、『日販ウィークリー』(1994年1月2週号)掲載の筆者の記事をもとにしている。今回、関口存男生誕110周年を期に加筆訂正した。引用文では、適宜、現行の漢字を用いている。

森鷗外訳 『ファウスト』²

メフィストフェレス：
そんなら此世でわたしはあなたに身を委ねて、
休まずに顎で使はれませう。
そこであの世でお目に掛かつた時は
あなたがあべこべに使はれて下さるですね。

ファウスト：
あの世なんぞは己は余り気にしない。
まあ、君が此世界をこなごなに砕いたところで、
別の世界がその跡へ出来ようといふものだ。
この大地から己の歡喜は湧く。
この日が己の苦痛を照す。
己が此天地に別れてしまふことが出来たら、
それから先はどうにでもなるが好い。
未来に愛や憎〔にくみ〕があるか、
あの世にもまた此世のやうに
上と下とがあるかなど、
己は問うて見る気がないのだ。

関口存男訳 『ファオスト抄』³

〔メフィストフェレス：〕
ではいかがです、此の世では あなたの奉公人として

² 『鷗外全集』第12巻 岩波書店、1972〔昭和47〕年：126-127頁。初版は、『ファウスト』 富山房、1913〔大正2〕年。

³ 『独逸語訳註叢書』第拾六編、日光書院、1941〔昭和16〕年。三修社、1953〔昭和28〕年 『関口存男著作集 翻訳・創作篇』第1巻、三修社、1994〔平成6〕年：12,13頁。引用は『著作集』から。全73頁の対訳本である。「序」2頁、解題「Faustに就て」2頁、本文「対訳」20頁、「解説と訳註」42頁。ゲーテ原文の第1656-1740行を扱っている。

顎でしゃくつてお好きなやうに 使ひこなして頂いて、
さて其の次に又の世で お目に掛かつた砌りには
こんどは貴君がわたくしの 奉公人といふことに。

〔ファオスト：〕

死後の世界がどうあらうと おれはちつとも苦にはせぬ。
えい邪魔つけなと今生を 蹴つ飛ばかした其の上は、
格別心配しなくとも 後生は自然とやつて来る。
わしが求める快樂は 『此の』世の中の快樂だ。
わしが求める苦しみは 『此の』世の中の苦しみだ。
此の世の中の苦樂から お暇が出たら、何のその、
あとは野となれ山となれ、われらの知つた事ではない。
来世とやらにも憎しみや 愛の茶番があるかとか、
東西南北、みぎひだり 上下の区別があるかとか、
さういふ種類の詮議なら、面白くもない、止して呉れ。

引用したのは、ゲーテの『ファウスト』第一部、ファウスト博士が悪魔
メフィストフェレスに魂を売り渡す契約をする、有名な書齋での一場面で
ある。

ドイツ古典文学の翻訳者として第一に名前があがるであろう森鷗外
(1862 - 1922〔文久2 - 大正11〕年)の次に紹介したのは、ドイツ語学の
権威であり、外国語教育者であり、新劇活動の実践者でもあった、関口存
男(せきぐち つぎお 1894 - 1958〔明治27 - 昭和33〕年)というひとりの
天才による翻訳である。関口は、ゲーテの大作の中から「思想的に全篇
が漠然と見渡し得、同時に一篇の主眼目が力強く浮び出てる」⁴箇所を選
択し、訳したのであった⁵。そして、必ずしも「原『文』」には忠実ではない

⁴ 『関口存男著作集 翻訳・創作篇』第1巻：5頁。

⁵ 岩仲廣知によると、(この『ファオスト抄』以前に)関口は「20を越したばかり」
で『ファウスト』の訳を出版したという。それは大正初期に当たり、鷗外訳に対抗
するものとして受け止められた、という(参照：荒木茂雄ほか編 『関口存男』(三
修社、1959〔昭和34〕年：110頁〔『関口存男の生涯と業績』(三修社、1967〔昭和
42〕年))。この関口訳については、当該書『関口存男』の業績一覧にも掲載されて

が、原『意』と、原『色』と原『勢』には忠実」⁶たることを目指した。

翻訳において大切なのは、もちろん語学力であり、外国語の読解力であり、「原文に忠実であること」である。しかし、原文に忠実であるということがその内容を正確伝えることになるとは限らないのだ。ここに翻訳の難しさがあるといえる。時には原文にないことがらを補わなくてはならないし、省略することも、あるいは大胆に、まったく別の表現にしてしまうことも必要であろう。原文の面白さや勢い、場面の雰囲気、登場人物の微妙な心の揺れ、口調、息づかいといったものを、それに最もふさわしい日本語に置き換えて伝えることこそ翻訳者の使命ではないだろうか。原文には直接かわらずに、翻訳だけを目にする読者としては、思考のバックグラウンドの異なる海外の作品を本当の意味で「理解」するには、日本語の発想に沿って、原文にはあるいは書かれていないかもしれない別の言い方で提示してもらわなければ難しいのである⁷。

ところで、ドイツの文学作品というと、どちらかといえば地味な印象があるかもしれないが、実はとてもダイナミックな表情に富んだ文学なのである。特に、戯曲の翻訳の場合、テンポの良さや自然な語り口が要求されるが、これは語学の知識だけではとても太刀打ちできない。だからこそ、日本語の文章力、語彙力とともに、演劇の実践経験が物を言う。関口存男は青年時代、黎明期の新劇活動に取り組み、自ら台本も作っている（踏路社に在籍）。『素人演劇の実際』⁸に見られるきめこまやかな演出でも知られ、その資質が天性の語学力とあいまってすぐれた翻訳を生みだすことになったのだろう⁹。語彙力に関しては、ある日、ドイツ人とひとつのことがらを

おらず、本証言の真偽を含め調査はついていない。1919〔大正8〕年25歳の時のゲーテ「タッソー」翻訳（『世界名脚本集』第1編、以文社）と誤解したか、あるいは、何らかのゲーテ選集の一部か。

⁶ 『関口存男著作集 翻訳・創作篇』第1巻：6頁。

⁷ この辺りの事情を関口は、文章の「達意眼目」を捉えることが重要、と説明している（参照：『関口存男』：324 - 327頁。）

⁸ 愛育社、1947〔昭和22〕年。『関口存男著作集 翻訳・創作篇』第10巻（三修社、1994〔平成6〕年）所収。

⁹ 鷗外訳も上記の富山房刊行の訳文で上演された。その訳文は、関係者の伊庭の証言に拠れば、「大胆な、そして平易な現代の口語に訳されてみて、エロキウシヨンの上に少しの困難をも見出す事が出来なかつた」ものである。但し、概して鷗外の訳文には「一センテンスが比較長い〔ママ〕のが沢山あつて、全文の意味を通す為めに、エロキウシヨンの都合上、イナンシエシヨンの〔ママ〕が附けにく、やゝ

どれだけ多様に表現できるかをドイツ語で競ったところ、勝ってしまった、という驚くべきエピソードが残っている。これは日本語の語彙の豊富さについても同様で、厳選に厳選を重ねた訳語が採用されているのだ。翻訳ではなく文字どおりの「通訳」つまり、意味を通じさせるということに徹した姿勢は、60年以上たった今でも色あせることはない。

ここで、ひとつ注目したいことがある。それは翻訳者の作品に対する態度である。冒頭に掲げた翻訳の一部を読んでみるだけでも、関口存男と森鷗外の『ファウスト』に対する態度、思い入れの違いが見てとれるだろう。冷静で客観的な態度を保持しようとした鷗外の目と、ゲーテは「Faust 博士の運命の中に凡ゆる例外的、非凡的、悲劇的、男性的、冒険的一生の象徴を感じた」のだと解釈し、「ぼんやりした酔生夢死の一生よりは、さうした〔命の続く間だけが我が世だと云ふ悲壮な意識を抱い〕た」一生の方が、二乗三乗四乗五乗した白熱的・高圧的人生ではあるまいか？」¹⁰と熱っぽく語る関口存男の見方とはおのずと違って来るだろう。もちろん、時代背景や各人の資質を考慮したならば、一概にどちらか一方を否定的に見ることはできないけれども、やはり主人公に入りこみ、共感している翻訳の方が劇的で魅力的ではないだろうか。

さらに、もうひとつ言えるのは、「動き」の見える文章はふるびない、ということである。登場人物の心の動きのみならず、場面の中での立体的な動きが展開されるか、つまり場所の移動までもがしっかり想定された文章は生命力を保てるのだ。これは、逆に言えば一読してその場面、登場人物の動きのイメージが明確に浮かぶ文章は時を隔てても（仮名づかいが違おうとも）読み手を惹きつけることができるということだ。関口存男の演劇経験はここでも威力を発揮している。登場人物を動かして舞台を作り上げていく過程でつちかわれた、動きに対する敏感さが、翻訳をする際にも「動

ともすると棒読みの朗詠体になり易い」とも言う。伊庭孝 「ファウスト上場に就ての困難」 『歌舞伎』(153号、大正2、3) 引用は、『鷗外全集月報』月報12、岩波書店、1972〔昭和47〕年：10頁。

安部能成に抛れば、関口は法政大学教員時代、同僚の内田百間とともに学生に『ファウスト』「アウエルバハの酒場」の原語上演をやらせた。「関口君が細かい個々の指導には苦労したのではないか」とのこと（前掲『関口存男』：240頁）。また、高橋英夫 「「関口文法」の引用例文」 『図書』(岩波書店、第661号(2004〔平成16〕年5月)：56-57頁)も参照。

¹⁰ 以上、『関口存男著作集 翻訳・創作篇』第1巻：32、33頁〔解説と訳註〕。

き」が目に見えるようにはっきりと文章化できるということにつながったのだろう¹¹。

翻訳に対する意見はさまざまである。「翻訳はやはり、原文に忠実な訳文であるべきだ」という考え方もあるだろうし、「多少原文からは離れても『わかる』日本語がいい」という意見もあるだろう。しかし、日本の翻訳史の中で輝くひとつの試みであった関口存男の翻訳と、外国の文学を翻訳して紹介するということだけにとどまらず、言語を通して人間存在の意味をきわめ、解釈しようとした関口存男の志向がこのファウスト翻訳に如実に現れているのだ。これを埋もれさせるわけにはいかない。生誕 110 年にしてなお今後の研究が俟たれる所以である¹²。

(しばた あきこ)

SHIBATA, Akiko: Dynamik der Übersetzung von Tsugio SEKIGUCHI.

¹¹ 関口の訳文には浄瑠璃の影響が見られるという意見を仄聞する。訳文の調子の源泉研究は関口研究および翻訳史考察の上で重要である。

¹² 彼の翻訳で活字になったものは全て『関口存男著作集 翻訳・創作篇』(全 10 巻: 三修社、1994〔平成 6〕年)に収録されている。このほかに、翻訳はされたが活字化されていないものや原稿が見つからないものが、残念ながら存在する。